『香川県綜合郷土研究』における新民謡
―《高松小唄》に着目して―

鈴木 慎一朗

On New Folk Song in *Kagawakensougokyoudokenkyu*: "Takamatukouta"

SUZUKI Shinichiro

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第19巻　第1号　抜刷
REGIONAL STUDIES（TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES）Vol. 19 / No. 1
令和４年 8月25日発行　August 25, 2022

『香川県綜合郷土研究』における新民謡

－《高松小唄》に着目して －

鈴木慎一朗*

On New Folk Song in *Kagawakensougokyoudokenkyu*:
"Takamatukouta"

SUZUKI Shinichiro*

キーワード：『香川県綜合郷土研究』，新民謡，《高松小唄》
Key Words: *Kagawakensougokyoudokenkyu, Bisaikyoudokenkyu:Kanoiwa*, New Folk Song, "Takamatukouta"

はじめに

本稿の目的は，香川県師範学校・香川県女子師範学校によって，1939（昭和 14）年に編纂された『香川県綜合郷土研究』における新民謡の位置付けを明らかにすることである。

文部省は 1930（昭和５）年，各師範学校に郷土研究施設費を交付し，全国の師範学校において郷土教育が展開される。各師範学校は郷土室を整備し，生徒主体の学習が開始される[1]。

1935（昭和 10）年，文部省は再び郷土研究施設費を交付し，山梨県師範学校・山梨県女子師範学校に『山梨県綜合郷土研究』の編纂を行うよう示唆する[2]。筆者は,『山梨県綜合郷土研究』ならびに 1937（昭和 12）年に発行された，山梨県女子師範学校編『微細郷土研究：加納岩町に関する』における新民謡の位置付けを検討した。その結果，山梨県師範学校と山梨県女子師範学校の郷土教育において，大衆文化である新民謡を積極的に取り上げていた点を明らかにした[3]。

文部省は，山梨県に続き，1936（昭和 11）年，秋田県，茨城県，香川県を指定して，各師範学校を中心とした『綜合郷土研究』の編纂を企画する。では，これらの県においても，山梨県と同様に新民謡を積極的に取り上げていたのであろうか。本稿では，香川県を事例とする。

先行研究としては，外池智（2004）が挙げられる。『香川県綜合郷土研究』の編纂の経緯ならびに香川県女子師範学校における郷土教育の展開について明らかにされている[4]。当然のことながら，新民謡を対象とした研究ではないため，新民謡については言及されていない。

《高松小唄》に関する先行研究としては，東道人（1995）が挙げられる[5]。全国の野口雨情（1882-1945）の新民謡を調査した貴重な研究である。しかしながら，音楽的な側面や師範学校の側面については触れられていない。他方，宮脇衛大と大山晃らによって，《高松小唄》の再現コンサートが 2003（平成 15）年に行われた[6]。

これまでに筆者は，香川県師範学校（1943 年度以降，香川師範学校）を事例に挙げ，調査を進め，博士論文『昭和戦前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究』（2006 年）として発表した[7]。上記の研究では，府県立中等学校程度であった師範学校が，1943（昭和 18）年の師範教育令改正により，官立専門学校程度に昇格した際の音楽教育実践の変容を解明した研究である。郷土教育については対象としておらず，新民謡についても取り上げていない。

研究方法としては第一に，香川県師範学校・香川県女子師範学校を概観する。第二に，香川県師範学

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

校の郷土教育を概観する。第三に,『香川県綜合郷土研究』の編纂の経緯や特色を概観する。第四に,『香川県綜合郷土研究』における民謡に着目し，新民謡の位置付けを明らかにする。第五に,新民謡である，野口雨情作詞，中山晋平（1887-1952）作曲の《高松小唄》の特徴を分析する。以上の作業を通して，香川県師範学校・香川県女子師範学校の郷土教育における新民謡の位置付けを解明する。

Ⅰ. 香川県師範学校・香川県女子師範学校の概観

1. 満州の動向

1928（昭和３）年，日本軍（関東軍）は，北京から奉天に引きあげる途中の張作霖（1875-1928）の乗った列車を爆破し,殺害した(満州某重大事件)。1931（昭和６）年９月には，奉天郊外の柳条湖で南満州鉄道の線路が爆破され,満州事変が起きる。1932(昭和７）年３月，清朝最後の皇帝溥儀（1905-1967）を執政（後の皇帝）とする満州国を成立させる。同年７月，盧溝橋事件をきっかけに，日中戦争へと突入する。

1924（大正 13）年，南満州鉄道株式会社の経営による教員養成機関である「満州教育専門学校」が大連に創設された。1926（大正 15）年９月，奉天の新校舎へ移転し，本格的に養成を行う（図１)。翌年の1927（昭和２）年４月,「満州教育専門学校附属小学校」が開講する。教科ごとに専科の教員がおり，経済的にも恵まれ，充実した施設・設備や教材を備えていた。1930(昭和５)年度からは幼稚園を附設し，1932（昭和７）年度から養護学級（特別支援学級）も設置される。しかしながら，1938（昭和８）年３月をもって，満州教育専門学校は廃止される[8]。附属小学校については,「奉天千代田小学校」と改名され，研究校としての側面は維持される[9]。

図１　満州教育専門学校
出典　国士舘大学　学術情報リポジトリ

1934（昭和９）年８月，師範教育令，高等師範学校官制が交付され，９月,「吉林高等師範学校」が開校する[10]。

1937（昭和 12）年５月，学制要綱及び学校令，10月，学校規程が交付され，1938（昭和 13）年１月から施行される。師道教育令も出され，省又は特別市による「師道学校」と国による「師道高等学校」が設置されることになる[11]。

これまでの省立高級師範学校を改編して，15 校の師道学校が設置される。師道学校は男子初等教師の養成を目的とした。1941（昭和 16）年３月には，18校となり,「新京師道学校」,「吉林師道学校」,「奉天師道学校」,「牡丹江師道学校」等が存在した。一方，女子初等教師の養成に関しては，女子国民高等学校にさらに修業年限１ヶ年の「師道科」を附置し，女子国民高等学校卒業生を入学させていた[12]。

吉林高等師範学校は 1938（昭和 13）年,「師道高等学校（男子部)」となる。師道高等学校（男子部）は 1942（昭和 17）年,「師道大学」と改称する[13]。一方，女子部に関しては，新京（現在，長春）に,「師道高等学校(女子部)」が新設される。1942(昭和 17)年に「師道大学（女子部)」,1944（昭和 19）年に「女子師道大学」となる。

現職教育に関しては，1933（昭和８）年に「国立教員講習所」が創設され，1938（昭和 13）年,「中央師道訓練所」として改組され，新京にあった。1944（昭和 19）年,「満州国立中央師道学院」と改称，改編される[14]。

その他,教員養成機関ではないが,1938(昭和 13)年５月,「建国大学」が新京に新設される。満州国を構成される五族，つまり日本人，満州人（漢族・満州族),朝鮮人,蒙古人,ロシア人が共に学んでいた。副総長として，京都帝国大学教授であった作田荘一（1878-1973）が着任した。教授陣には，大阪府天王寺師範学校教諭であった森信三（1896-1992)，帝国美術学校（現，武蔵野美術大学）教授であった金原省吾（1888-1958）らがいた[15]。

このように満州国における教員養成の組織は整備されつつあったものの，建国当初，大勢の中国人教員が追放，処刑されており，さらに日本人の移民も進み，教員不足は続いていた。

上記を解消するために,文部省は,1939(昭和 14)年１月，日本の師範学校に「満支方面日本人小学校教員養成師範学校特別学級（大陸科)」を設置することを発表する。４月には，秋田県師範学校，茨城県師範学校，静岡県浜松師範学校，福井県師範学校，三重県師範学校,広島県師範学校,香川県師範学校,

長崎県師範学校，熊本県師範学校，鹿児島県師範学校に設置された。しかしながら定員 40 名を満たしたのは 10 校中，香川県師範学校のみであった。この原因について文部省は次のように分析する[16]。

> 殊に大陸科の場合には待遇がさして好条件に恵まれぬ上に大陸の何れに向けられらるか判らぬといふ一種の不安の気持があること。

1940（昭和 15）年４月には，栃木県師範学校，富山県師範学校，長野県師範学校，岐阜県師範学校，兵庫県師範学校，鳥取県師範学校，福岡県師範学校，佐賀県師範学校，大分県師範学校，宮崎県師範学校にも設置される。1942（昭和 17）年度の入学生が 1944（昭和 19）年９月に繰り上げ卒業をしたのを最後に廃止される[17]。

上記とは別に，1941（昭和 16）年４月，「在満師範学校（1944 年度以降，新京師範学校）」が新京に設立される。在満国民学校の教員養成を目的とし，「本科及講習科」が置かれ，「本科」は修業年限５年の「第一部」と修業年限２年の「第二部」により構成された[18]。1943（昭和 18）年 12 月 24 日の朝日新聞には，「生徒募集（本科男子）」の広告が掲載される[19]。

1944（昭和 19）年４月には，「牡丹江師範学校」が設立される。その他，満州国内ではないが，1936（昭和 11）年６月には，「旅順師範学校」，「旅順女子師範学校」が開設されていた[20]。

2. 香川県師範学校の動向

前述の通り，1939（昭和 14）年４月，香川県師範学校において「満支方面日本人小学校教員養成師範学校特別学級（大陸科）」（以下，大陸科，と表記）が設置される。他の師範学校では定員割れをしていた中，香川県師範学校には 136 名の志願者（130 名受験者）もあり，40 名が入学するという盛況ぶりであった。大陸科では，週３時数，中国語の授業等が行われていた（図２）。

図２　大陸科の授業
出典　『創立五十周年記念　学校一覧』1940 年。

1939（昭和 14）年 10 月，創立五十周年記念式が行われ，1940（昭和 15）年６月，『創立五十周年記念学校一覧』が発行される。

1939（昭和 14）年 10 月には，「石清尾修錬道場」が完成する。

3. 香川県師範学校・香川県女子師範学校の音楽教員

高松市にあった香川県師範学校から女子部が坂出市に分離独立し，1912（明治 45）年，「香川県女子師範学校」となる。1917（大正６）年には，「香川県立坂出高等女学校」（現，香川県立坂出高等学校）が併設される。

坂本麻実子は大正期の香川県の音楽教員について「文検出身者が健闘している」と分析する[21]。表１は，郷土研究施設費が交付された 1930（昭和５）年以降の香川師範学校ならびに香川県女子師範学校の音楽教員を一覧にしたものである。

末澤信夫は文検ではあるが，昭和期のこの時期，東京音楽学校甲種師範科の卒業生，東京音楽学校におかれた第四臨時教員養成所の卒業生が着任している。

表１　香川県師範学校・香川県女子師範学校の音楽教員

年	香川県師範学校	香川県女子師範学校
1930（昭和 5）	豊崎雅和　1925（大正 14）年甲種師範科卒 三好伊和雄	末澤信夫　1923（大正 12）年文検 神崎節子　1929（大正 4）年甲種師範科卒
1931（昭和 6）	豊崎雅和 三好伊和雄	末澤信夫 尾形サダ　1930（昭和 5）年甲種師範科卒
1932（昭和 7）	豊崎雅和 三好伊和雄	末澤信夫 尾形サダ
1934（昭和 9）		末澤信夫 尾形サダ
1935（昭和 10）	永山英夫　1930（昭和 5）年臨時教員養成所	末澤信夫

		尾形サダ
1936(昭和11)	鈴木武五郎　1930(昭和5)年甲種師範科卒	末澤信夫 尾形サダ
1937(昭和12)	鈴木武五郎	末澤信夫 尾形サダ
1941(昭和16)	鈴木武五郎 金光武義　1941(昭和16)年甲種師範科卒	末澤信夫 尾形サダ

注　『中等教育諸学校職員録』等から作成。

Ⅱ. 香川県師範学校の郷土教育の概観

1928（昭和３）年，香川県教育会の主催により，「全国教育大会」を高松で開催するにあたり，冊子『讃岐』が編纂され，郷土調査も行われた[22]。

1930（昭和５）年７月，郷土研究施設費の交付に先立ち，文部省から「郷土研究施設費支出標準」が各道府県に通牒される。これを受け，香川県師範学校では，次の通り，体系を立てる[23]。

修身教育部
郷土史部
博物部
農業部

同年12月，郷土研究施設費の交付の指令が各道府県に出される。1931（昭和６）年２月，県当局から正式に「郷土施設費が実際に下附される事になつたから本年度中に可然使用さるるやう」との指令が入る[24]。６月頃，郷土紀要育施設の現況を文部省に報告する。

1931（昭和６）年１月，「師範学校規程改正」が示され，「地方研究」が導入され，４月から実施される。

1931（昭和６）年12月，第二回目の郷土研究施設費が交付される。香川県師範学校の郷土調査体系は次の通り，修正される[25]。

修身教育国語部
地理歴史部
博物部
農業部

幸寄宿舎の第三寮が空いたため，以下の通り，臨時郷土室が設置される[26]。

第一室　郷土地理室
第二室　郷土史室
第三室　郷土地質室
第四室　郷土生物室
第五室　郷土農業生産室
第六室　郷土農業経済室

1932（昭和７）年12月には，『香川県師範学校郷土紀要』が発行される。具体的には以下の通り[27]。

第一輯上　香川県各種グラフと分布図
　　1932（昭和７）年12月
第二輯　　香川県地質概要
　　1932（昭和７）年12月
第三輯　　香川県地質図
　　1933（昭和８）年５月

1933（昭和８）年１月，香川県師範学校において香川県教育振興会主催の「教育品創作展覧会」が開催される。そこでは香川県師範学校の郷土研究物としての「香川県地質図」と「香川県地理模型」が共に第一等に当選する[28]。

1933（昭和８）年４月，普通教育室に余裕が生じたこともあり，新たに「郷土館」が以下の通り，設置される[29]。

第一室　高松市の概観
第二室　香川県の開化史　郷土研究室
第三室　香川県の自然
第四室　香川県の経済
廊下　　国立公園瀬戸内海の展望

1936（昭和11）年11月，香川県師範学校郷土研究部編『香川県農村漁村の生活』が発行される。

Ⅲ. 『香川県綜合郷土研究』の概観

1. 『香川県綜合郷土研究』編纂の経緯

1936（昭和11）年度，文部省から香川県が指定された理由について，外池は，第一に文部省嘱託小田内通敏と陶（すえ）尋常高等小学校（現，綾川町立陶小学校）とのかかわり，第二に陶尋常高等小学校訓導太巻正

一，香川県師範学校教諭桑島安太郎による『郷土教育』への論文掲載，第三に香川県師範学校・香川県女子師範学校による郷土教育実践の蓄積を挙げる[30]。

1936（昭和 11）年度，文部省から香川県に対して『綜合郷土研究』編纂の指令があった。香川県から委嘱を受けた，香川県師範学校・香川県女子師範学校においては直ちに，1936（昭和 11）年 12 月 20 日に発行された『山梨県綜合郷土研究』を参考に，協議を開始する。同年 12 月 19 日，県視学の服部基一の統制のもとに，文部省嘱託の小田内通敏と小田内通久を迎え，香川県師範学校において，香川県師範学校の全教職員と香川県女子師範学校の主な教職員が出席し，協議研究会が開かれる。そこでは研究項目，両師範学校の分担，香川県の地理区が決定される。1937（昭和 12）年１月 21 日，県視学の服部基一の統制のもとに，香川県女子師範学校において，両師範学校の各部の研究主任が出席し，協議会が開かれる。そこでは各部の研究主任から提出された細部項目の各分担者が決定される[31]。

1937（昭和 12）年２月 22 日から 26 日まで，文部省主催の「郷土研究講習会」が香川県師範学校において開催される。講師として，西田直二郎，寺田貞次，須田浩二，小田内通敏，山崎犀二が招かれる。受講者は，香川県及び近県小学校ならびに中等学校の教員，約 300 名が集まる。

２月 24 日・25 日，小田内通敏および小田内通久の指導のもとに，香川県師範学校において，各研究主任が集まり，協議会が開かれる。同様に，２月 26 日・28 日，香川県女子師範学校においても開かれる。

５月 18 日，県教育課長の剣木享弘の招集により，教育課首席属の森寛一郎，香川県師範学校長の近森幸衛，香川県女子師範学校長の伊東豊彦，香川県師範学校教諭の桑島安太郎，香川県女子師範学校教諭の松野憲一，石井宣一が協議を行う。文部省からの郷土研究方針の新指示を受けた後，郷土研究費用の使途変更ならびに県下小学校，中等学校および関係各方面に発送依頼する「郷土研究調査表」について協議する。６月には，「郷土研究調査表」を発送すると同時に，研究主任がその説明依頼のために出向いた。

11 月 17 日・18 日，小田内通敏，小田内通久を迎えて，香川県師範学校において研究会を開き，返送された「郷土研究調査表」の調査結果について指導を受ける。同様に，11 月 19 日・20 日，香川県女子師範学校においても行う。そして 1938（昭和 13）年１月末を原稿の締め切りとする。なお，物価高騰，人件費高騰の影響を受け，印刷費の削減のために，研究内容を精選し，頁数を縮小することになる。

３月 20 日・21 日・22 日，小田内通敏と小田内通久を迎えて，香川県女子師範学校において，原稿の形式，内容について指導を受ける。そして５月末までに清書することになる。各研究主任は提出された原稿の訂正加除を行い，６月 20 日までに文章校正係に提出する。文章校正係は８月末までに校正を行う。整理統制された原稿は，憲兵隊高松出張所および県高等課の検閲を受け，10 月末に原稿が完成する。12 月末の発行を予定していたものの，時局の影響を受け，発行が遅れ，1939（昭和 14）年３月 20 日印刷，３月 30 日発行となる[32]。

2.『香川県綜合郷土研究』の特色

発行された『香川県綜合郷土研究』の目次は以下の通りである。

第一　概観
第二　生活環境
第三　歴史的発達
第四　人工
第五　聚落
第六　経済
第七　産業
第八　交通
第九　行政
第十　社会
第十一　文化
第十二　教育
第十三　結論

Ⅳ.『香川県綜合郷土研究』における新民謡

1.『香川県綜合郷土研究』における民謡

『香川県綜合郷土研究』において「民謡」は「第十一　文化」の大項目の中に掲載される。「第十一　文化」は以下の中項目によって構成される。

一　地方文化の胎生
二　地方気質の生成
三　史的記念物
四　先賢と其の業績
五　神社宗教
六　民俗
七　郷土芸術

八　文化的施設
九　特別研究

「七　郷土芸術」は，以下の通り，構成される。

1　民謡
2　舞踊
3　演劇
4　民芸
5　郷土玩具

「1　民謡」は，733 から 738 ページにかけて，「一序言」，「二　伝統的民謡」，「三　新作民謡」の順で構成される。執筆は，音楽を専門とする，香川県師範学校教諭の鈴木武五郎（1905-1964）によってなされる。鈴木は，1926（大正 15）年，秋田県師範学校を卒業し，1930（昭和５）年，東京音楽学校甲種師範科を卒業する。香川県師範学校には，1935（昭和 10）年 12 月 26 日に着任する。

「序言」では以下の通り，始まる[33]。

讃岐の国に於ける民謡は，古い時代より相当に行はれてゐたらしく，豊臣秀吉の朝鮮征伐の際，藍飽島民は水夫となつて，兵糧運搬に功を立て，秀吉より朱印状を賜はつたこの時の船出を祝つて，
「やあとめでたいな　この御用は　めでたのをえ　それはかあ，えたもゑさかゑるの，木の葉　しげる，よかれいな　めでたの，今のうたひは，何と歌ひ出したいな，てんてんからりのからころも　御家繁昌と歌ひ出したいな，めでため　枝も栄え　木の葉も。」
と歌つた歌の一節を見ても其の一端を窺ふことが出来る。
その後徳川時代に至り，歌舞音曲雑伎等が一般的に行はれるやうになり，民謡も徳川末期に及んで愈々盛んになつて来た。今日の民謡も伝統的なものは，この時代からのものが多いかと思はれる。
次にこれと相俟つて他地方から移入せられて次第に郷土化されたもの頗る多く，又近年に至り専ら郷土愛を主とする歌謡を新作奨励し，この地方的新民謡に依り，観光讃岐を紹介し，且は青年男女に高尚な趣味と健全な気風を養はしめようとしてゐる。

このように郷土愛を題材とした新作の地方的新民謡の新作が奨励され，観光讃岐を紹介し，青年男女に高尚な趣味と健全な気風を養うことが求められていたことが記されている。

2.『香川県綜合郷土研究』における「伝統的民謡」

「二　伝統的民謡」については，以下の通り分類されて，紹介される。譜例はないが，曲名は付けられており，歌詞の一部が列記されている。解説が記されている民謡もある[34]。

何度聞いても美しく，何度歌つても嫌にならない。歌ふ程聞く程味が出て来て酌み尽せない深味があり，ひしひしと迫つて来る何ものかがある。それは民謡の特色である。何時何処で誰が作つたのか分らない民謡は，明け暮れ土に親しむ農夫達や，川を上下する筏乗りや，茂り合つた木の蔭に憩ふ樵夫達の様な自然に親しむ生活をしてゐる人達に依つて，長い間に育まれて来たものである。人間の健康的な生活の中から溢れ出た感情の自然な素直さ，素朴さ，純一さ，一にそれらから出た叫びであつて豊な土地の香を含んでゐる。
讃岐の伝統的民謡も一般に発祥の年代を明らかにしてゐない。民謡を其の用途上より見る時は，神仏に関する宗教的色彩の濃厚なもの，祝の歌，労働や作業に歌はれるもの，盆の如き年中行事等に歌はれるもの，又内容より見る時は，自然を歌つたもの，恋愛を歌つたもの，歴史的なもの等種々あるが，ここでは便宜上用途の上より次の如く分類することとする。

（一）宗教的歌謡
（二）祝歌
　（イ）家固めの歌
　（ロ）婚礼の歌
　（ハ）大魚歌
（二）その他の祝歌
（三）盆踊の歌
（四）労働に関する歌
　（イ）田植歌
　（ロ）地槌歌
　（ハ）稲こき歌
　（ニ）草取り歌
　（ホ）水かへ歌
　（ヘ）臼挽の歌

（ト）籾摺歌
（チ）麦たたきの歌
（リ）網引の歌
（五）其の他の民謡
（六）童謡

「（五）其の他の民謡」では，以下の通り，紹介される[35]。

以上の外に尚多くの民謡を有してゐるが，その中本県特有のものは，仲多郡金刀比羅宮参詣の唄である。
一　金毘羅船々　追手に　帆かけて　シユラシユ　シユ　シユ　五人　百姓　の　大傘に　花の吹雪の　花の市。
二　金毘羅船々　追手に　帆かけて　シユラシユ　シユ　シユ　蝶もひらひら金毘羅参り　後や　先なる　道連れに。
三　金毘羅船々　追手に　帆かけて　シユラシユ　シユ　シユ　松の緑に紅葉は映えて小春日和　の　象頭山。
四　金毘羅船々　追手に　帆かけて　シユラシユ　シユ　シユ　夜半の　嵐の　天狗杉に　お山　清めの　片時雨。
五　金毘羅船々　追手に　帆かけて　シユラシユ　シユ　シユ　象の　御山の　其の石階は　一千四百と　九十五段。
大体歌詞を示せば右の如くであるが，この大意は信者をのせる多くの舟が順風に帆を揚げてすらすらと諸国を廻り，金比羅に到着し，此の次又もかやうに参詣したいと云ふ意味である。

この民謡は，香川県のお座敷唄である《金毘羅船々》である。金毘羅船とは，金刀比羅宮へ参詣に向かう人たちを本州から四国へ渡す船のことである。四国側の港は丸亀（丸亀市）と多度津（仲多度郡多度津町）で，大阪，兵庫（神戸港），室津（兵庫県たつの市），西大寺（岡山市），宇野（岡山県玉野市），下津井（岡山県倉敷市）から出港した。淡路島の南を通って阿波の徳島(徳島市)から入る船もあった。

《金毘羅船々》のＳＰレコードについては，1935（昭和 10）年５月にリーガルから,《ダンス音楽：金毘羅船々》として発売されるが，西洋の楽器による器楽合奏のみで，歌詞は歌われていない。

琴平の土産物の「船々せんべい」にも記され、今日も唄い継がれている歌詞は以下の通りである。

金毘羅船々　追手に帆かけて　シュラシュシュシュ　まわれば四国は　讃州那珂の郡　象頭山金毘羅　大権現

前述と比較すると，前半部分は同じ歌詞ではあるものの，後半部分は異なり，同一の歌詞は掲載されていない。『日本民謡大観』には，昭和初年に新作がつくられたと記されていることから,『香川県綜合郷土研究』の歌詞は昭和初年の新作の歌詞の可能性が高い[36]。

「移入された民謡」については，次のように説明される[37]。

この外なほ他から移入された民謡も多くあるが由来本県が四国の玄関であり，名勝の地である関係上，此等の大部分は観光客により伝へられたものであらう。その主なるものを挙げれば，《伊勢音頭》,《安来節》,《串本節》,《佐渡おけさ》,《関の五本松》等であるが，今は全く歌はれてゐないものもある。

三重県の《伊勢音頭》，島根県の《安来節》，和歌山県の新民謡《串本節》，新潟県の《佐渡おけさ》，島根県の《関の五本松》が，香川県でも流行していたことが読み取れる。これらの曲は，ＳＰレコードとしても発売された全国的にも有名な民謡である。

3.『香川県綜合郷土研究』における「新作民謡」

「新作民謡」では，次のように説明される[38]。

新作民謡には，主として観光讃岐を歌つたものが多く，随つて郷土紹介，名勝讃美の内容を具有してゐるものが多い。

そして,《高松観光節》が次のように紹介される[39]。

一，讃岐高松呼ぶかよ千鳥夢の桟橋夜明けごろ
囃子　一度見足らにや又の日ネ又の日来るなら連衆とネ
二，花の栗林波まで紅い橋の日傘でなほ紅い
三，見やれ潮風白帆も眠る鳶が輪をかく玉藻城
四，昔しのべば涙でくもる屋島山からうすれ月
五，八栗山寺霧で明けりや上り下りの遍路笠
六，瀬戸の内海とろりと凪いで島が島呼ぶ春の風

七，鬼ヶ島とはそりや情なや女木と男木とは夫婦島
八，燃える紅葉にあのこけ猿も蓑をほしげな寒霞渓
九，温泉藍江早瀬の河鹿なまじ想が寝さしやせぬ
十，四国四県の扇の要栄之高松末広と

1937（昭和12）年10月，《高松観光節》が発表される。歌詞は，観光課により募集され，北原白秋（1885-1942）により選ばれた[40]。
《高松観光節》に続き，以下の19曲が列記される。すべて香川県の新民謡である[41]。

《讃岐小歌》《坂出小歌》《仁尾小歌》《善通寺小歌》《多度津小歌》《紀伊村歌》《福日音頭》《観音寺囃子》《有明小歌》《染川節》《安田音頭》《小豆島小唄》《象郷音頭》《高松小歌》《香川県行進曲》《塩田小唄》《高松ノーエ節》《讃岐踊の歌》《高松節》

《讃岐小唄》の作詞，作曲者は不詳。1929（昭和４）年頃，香川県支会産業組合中央会が発行する「讃岐案内」のパンフレットには，《讃岐小唄》の歌詞が10番まで，以下の通り，掲載されている。

一，讃州讃岐は高松さまの，城が見えます波の上
二，屋島山から八栗を見れば，山と山とに橋ほしや
三，夏のまひるを藻の花咲けば，花にむらがる平家蟹
四，逢うて咽ぶか別れて泣くか，女木と男木との波の音
五，何を打つかや大槌小槌，沖の船頭が眠られぬ
六，島の娘の頬にも似たか，紅葉色どる寒霞渓
七，ほんにしほらし讃岐の富士よ，麓桃山蜜柑山
八，へさき揃へて四丁櫓で帰る，あれは鯛船鰆船
九，沖の鷗か金比羅樽か，今日もゆら〃波の上
十，讃岐野山に霞が立てば，つづく遍路の菅の笠

《坂出小唄》は西条八十（1892-1970）作詞，中山晋平作曲の新民謡である。1932（昭和７）年５月に発表され，７月に，ビクターからＳＰレコード(52388)が発売される。藤本二三吉（1897-1976）と四家文子（1906-1981）が唄う。

《仁尾小唄》は，吉岡武雄作詞・作曲で，1933（昭和８）年発表される。

《善通寺小唄》は野口雨情作詞，阪本歌都子作曲の新民謡である。

《多度津小唄》は西条八十作詞，中山晋平作曲の新民謡である。1933（昭和８）年７月に，ビクターからＳＰレコード（52763）が発売される。四家文子と勝太郎が唄う。

《安田音頭》は国井重二作詞，大野寛正作曲の新民謡である。

《小豆島小唄》は中岡草多処作詞，杵屋和吉作曲の新民謡である。

《高松小唄》は野口雨情作詞，中山晋平作曲の新民謡である。高松市が置市40年記念に委嘱し，1930（昭和５）年８月に高松市聚楽座で発表される。1931（昭和６）年１月，ビクターからＳＰレコード(51489)が発売され，葭町二三吉と四家文子が唄う。

《香川県行進曲》は長田幹彦作詞，中山晋平作曲の新民謡である。1933（昭和８）年12月，ビクターからＳＰレコード（52940）が発売され，篠崎淳之助が唄う。

《塩田小唄》は荒井情児，佐々紅華作曲の新民謡である。歌詞は以下の通り[42]。

一，俺はさぬきで　塩浜かせぎ
　　黒い毛脛は　親ゆづり
二，雨よ降るなよ　子持が泣くよ
　　塩田浜師の　俺も泣く
三，砂は焦げ砂　そうよ熱の砂
　　俺も素足で　年取つた
四，落ちた玉汗　砂が吸ふた
　　白い蟹めは　米搗いた
五，浜は照れ照れ　浜師は走れ
　　ひがな一日　照れ走れ

《讃岐踊り》は，河西新太郎作詞，作曲者不明の

新民謡である。1935（昭和 10）年，高松市商工会議所が，観光宣伝用の高松名所づくしの歌詞を，高松市在住の詩人河西新太郎に依頼した。

《高松ノーエ節》の歌詞は，以下の通り[43]。

一，高松名所を知らないお方に
　　高松名所を知らせたい
　　八栗屋島に壇の浦　栗林公園ノーエ
　　玉藻の浦には　月夜からすがカア〃

「結語」として以下の通り，締めくくられる[44]。新作民謡に関しては，観光客の旅情を慰めるとともに，地方青少年子女の愛郷心を培うことができるとしている。

以上は讃岐に於ける民謡の伝統的なものと外部より移入郷土化されたものにつき，その概略を記述したのであるが，就中労働歌が首位を占め，その歌詞の内容により郷土人の生活状況をも察知することが出来ると思ふ。本県は地理的条件が近畿に近く交通に便なること及び遊覧地に富み多くの旅客を迎へる関係上他地方民謡の流入するもの多く，且つ，最近に於けるラヂオの普及は全国各地の民謡を紹介してその流行を来し，著しく民謡の郷土色を稀薄ならしめたことは言を俟たない。
又一方に於てはこの恵まれたる史蹟名勝と郷土色の生活を歌つた情趣の極めて豊かな民謡が各地に新作せられて，この地を訪れる観光客の旅情を慰めると共に，動もすれば都会に憧憬れがちな地方青年子女に愛郷の心を培つてゆきつつあるのである。

1934（昭和９）年２月に香川県国立公園協会編『遊覧讃岐』が発行される（図３）[45]。「讃岐民謡集」も掲載され，表２の民謡の歌詞が紹介される。なお，16 の《民謡》は，《金毘羅船々》で次の歌詞も列記される[46]。これは『香川県綜合郷土研究』における《金毘羅船々》の歌詞とは異なるが，今日唄い継がれている歌詞と一致する。

金ぴら船々追風に帆かけてシユラシユツ〃〃
　　廻れば四国は讃州那珂郡象頭山金ぴら大権現

『香川県綜合郷土研究』が執筆されたのが，1937（昭和 12）年 11 月から 1938（昭和 13）年１月までであった。『遊覧讃岐』は 1934（昭和９）年に発行されていたことから考えると，これを参考にしながら，『香川県綜合郷土研究』が執筆された可能性が高い。

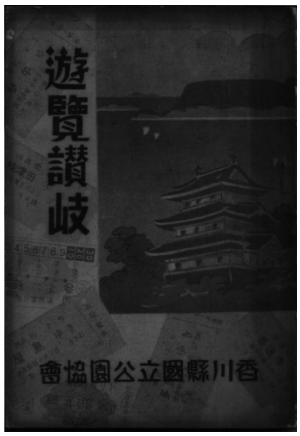

図３　『遊覧讃岐』の表紙
出典　香川県国立公園協会編『遊覧讃岐』1934 年。

表２　『遊覧讃岐』の「讃岐民謡集」

	曲名	師範
1	《高松小唄》野口雨情詩，中山晋平曲	○
2	《讃岐小唄》	○
3	《高松節》	○
4	《高松ノーエ節》	○
5	《高松盆踊の唄》	
6	《瀧宮小唄》	
7	《庵治小唄》	
8	《坂出小唄》西条八十詩，中山晋平曲	○
9	《塩田小唄》荒井情児詩，佐々紅華曲	○
10	《丸亀小唄》	
11	《丸亀の四季》	
12	《多度津小唄》西条八十詩，中山晋平曲	○
13	《港ぶし》多度津	
14	《多度津節》	
15	《琴平小唄》	
16	《民謡》	○
17	《讃岐新民謡》	
18	《観音寺小唄》	
19	《有明小唄》	○
20	《都々逸》	
21	《讃岐仁尾小唄》	○
22	《讃岐仁尾風景歌》	
23	《藍の江小唄》	
24	《小豆島小唄》中岡草多処詩，杵屋和吉曲	○

25	《神県小唄》国井重二詩，大野寛正曲	○
26	《安田音頭》国井重二詩，大野寛正曲	
27	《小豆島（国境節）》	
28	《淵崎双子小唄》	

注　○：『香川県綜合郷土研究』に掲載。

Ⅴ．《高松小唄》

1．《高松小唄》

《高松小唄》は野口雨情作詞，中山晋平作曲の新民謡である。高松市が置市 40 年記念に委嘱し，1930（昭和５）年８月に高松市聚楽座で発表される。1931（昭和６）年１月，ビクターからＳＰレコード(51489)が発売され，葭町二三吉と四家文子が唄う。

1930（昭和５）年７月 22 日発行の『香川新報』では，「野口雨情　中山晋平の両氏来高　《高松小唄》製作のため　取材は讃岐の名所旧蹟を背景に」の記事がある[47]。それによると，野口雨情ならびに中山晋平は，1930（昭和５）年７月 20 日，高松市を訪れ，川六旅館（現，エルステージ高松）に宿泊し，翌日の 21 日，高松市庁楼上において市当局と両氏が《高松小唄》製作のため打ち合わせを行う。野口の意向で，高松に限定せず，広く讃岐の名所旧跡を背景とする。歌詞は以下の通り。

一，一度どころか二度三度花咲かすヨ
　四国高松アサイノ〃サイノユートピアー
　囃「ハ，ついて来いとならついてゆく
　　さて一度が二度でもヨイ〃〃」
二，花の紅さよアノ木の葉の青さヨ
　ここは栗林サイノ〃サイノ四季知らず
　囃
三，屋島壇の浦アノ山ほととぎすヨ
　啼いて音をサイノ〃サイノしのばせる
　囃
四，沖の小豆島アノさ霧が隠すヨ
　紅葉ア色でもサイノ〃サイノついたやら
　囃
五，誰がいつきてアノ金毘羅さまヨ
　石の燈籠をサイノ〃サイノとぼすやら
　囃
六，櫻千本アノあら山陰にヨ
　誰が植えたかサイノ〃サイノ花が咲く
　囃
七，津田や鶴羽のアノ根上り松はヨ
　横へ横へとサイノ〃サイノ寝てなびく

両氏は７月 23 日まで滞在し，23 日には，市内各学校職員のため講習会を準備していると記される。７月 24 日の『香川新報』では「野口，中山の両氏が「民謡」の実地指導　きのふ四番丁校」のタイトルで次のように掲載される[48]。

民謡《高松小唄》の製作の為め二十日来高目下市内川六旅館に投宿中の野口雨情，中山晋平の両氏は二十三日午前十時から市内四番丁小学校に於て市内小学校男女教員を集めて中山氏の静岡民謡《天龍橋》の曲譜，舞踊の実地指導次で野口氏の小学校児童を対象としての「童謡民謡」について講話をなし正午閉会したが中山晋平氏は二十三日午後四時高松発で帰京の途についたが両氏は既に《高松小唄》の作詞作曲を終り其発表は中山氏帰京後推敲重ねて再び来高の上，野口氏の作詞と共発表になるらしい。

このように四番丁小学校（2010 年廃校，高松市立新番丁小学校）おいて教員対象の講習が行われている。

８月 31 日の『香川新報』では，《高松小唄》の楽譜と歌詞が掲載され，「《高松小唄》は大衆的盆踊りを加味　舞踊は団舞総踊りと宴会風　曲は二上りで洋楽のハ調」，「女給や芸妓さん　歌曲と振付の練習に　脂ものり切つて大童　発表会を前に」のタイトルで記事が掲載される。８月 30 日午後７時から，市内聚楽座において《高松小唄》の発表演奏会が開催される。また，「自分で歌つて楽しむ　極く平易に作曲　中山氏の感想談」の記事では，次のように中山は語る[49]。

自分は市の希望によつて従来ある《金毘羅船々》や《塩田小唄》と牴触しないやうに作曲しました。尚時代の要求から考へて聞いて楽しむでなく寧ろ自分で唄つて楽しむと云ふ風に極めて平易に作曲した積もりです。其上西洋かぶれのせぬ可なり国民性を尊重した旋律やテンポの速い時代に必要なリズムの鋭いことを要求する点等を考慮して作曲しました。尚「ついて来いとならついてゆくサテ一度が二度でもヨイヨイヨイ」の囃には地方のローカルカラーを入れたかつたが見つからなかつたのであり来りのものですましました。此際野口氏の歌詞に就ては私の感想の限りでない云々

『香川新報』では，「曲は二上りで洋楽のハ調」と

紹介される[50]。確かに調号には変化記号が用いられていないものの，西洋音楽のハ長調ではない。中山は1936（昭和11）年発行の『アルス音楽大講座』第４巻に所収された「流行歌の作曲」の中で，「西洋の音階をもつて作つた曲が比較的少ない事であり，殊に純粋の長旋法を用ひた曲は殆ど絶無である」と言及する[51]。また，「流行歌の主潮はやはり我々が小さい時から聞き慣れた短音階系の邦楽音階が邦人の耳には最も親しみ易いものである」とも述べる[52]。中山の使った音階として，「Ａ．短旋法」，「Ｂ．学童旋法（イ）長音階学童旋法，（ロ）短音階学童旋法」，「Ｃ．田舎節系民謡音階」，「Ｄ．都節系民謡音階」に分けている（図４）。これらに基づくと，《高松小唄》はイ音を主音とする短音階学童旋法に該当する。西洋音楽のイ音を主音とする短音階から第四音，第七音を省いた音階である。

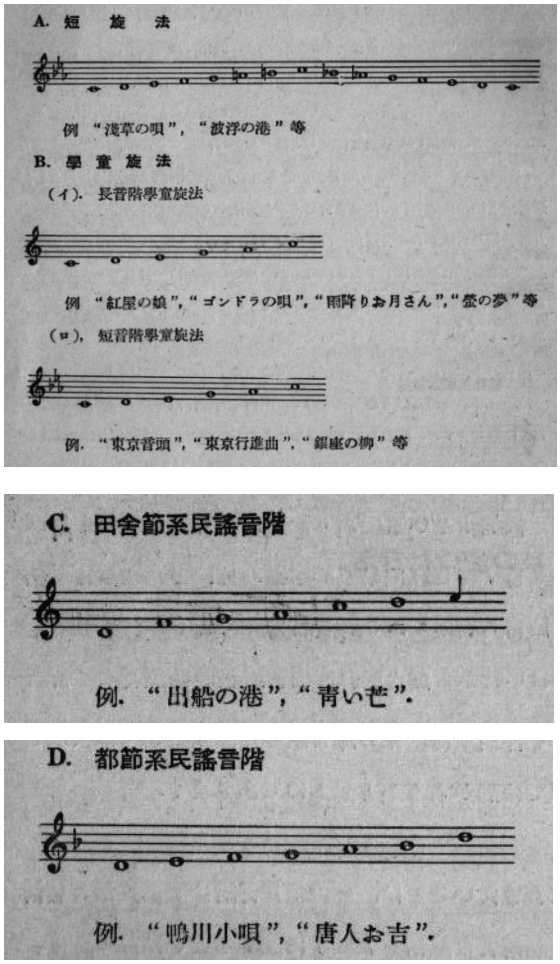

図４　中山晋平の流行歌の音階

出典　中山晋平「流行歌の作曲」北原鉄雄編『アルス音楽大講座第４巻作曲の実際』アルス，1936年，pp.178-179。

1930（昭和５）年には，版権が高松市所有とされる，《高松小唄》の絵葉書が出されている（図５）。８枚で構成され，１枚目が楽譜と写真で（図６），２枚目から８枚目までは，１番から７番までの歌詞と写真となっている（図７-13）。１番は高松港，２番は栗林公園，３番は壇の浦，４番は小豆島の寒霞渓，５番は金刀比羅宮，６番は安原千本櫻，７番は津田松原を題材とし，それらの写真も掲載されている。これらは讃岐の名所旧跡である。

図５　《高松小唄》絵葉書

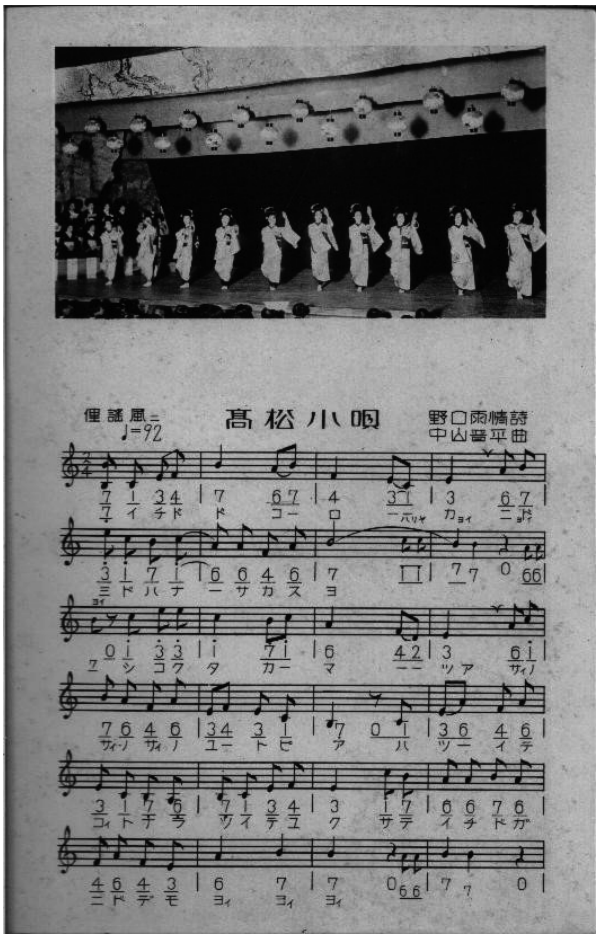

図６　《高松小唄》絵葉書

図７　《高松小唄》絵葉書　高松港

図９　《高松小唄》絵葉書
壇の浦から五剣山を望む

図８　《高松小唄》絵葉書
栗林公園掬月亭と其附近

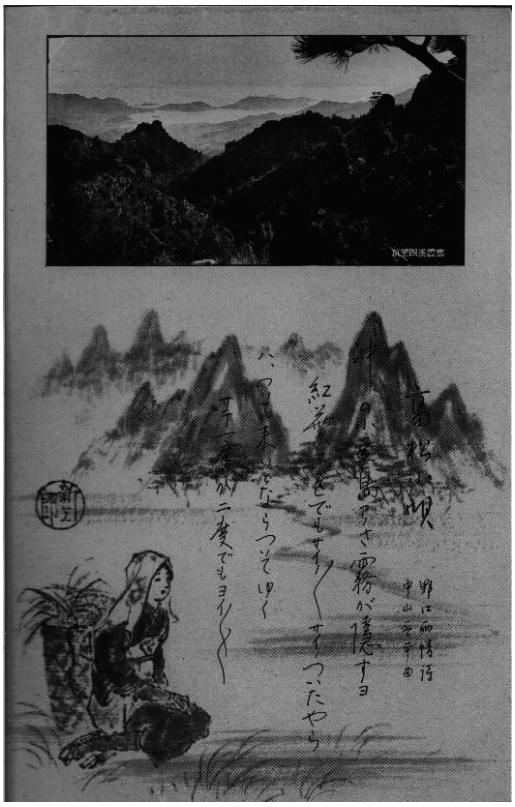

図 10　《高松小唄》絵葉書　寒霞渓四望頂

図 11　《高松小唄》絵葉書　金刀比羅宮本社

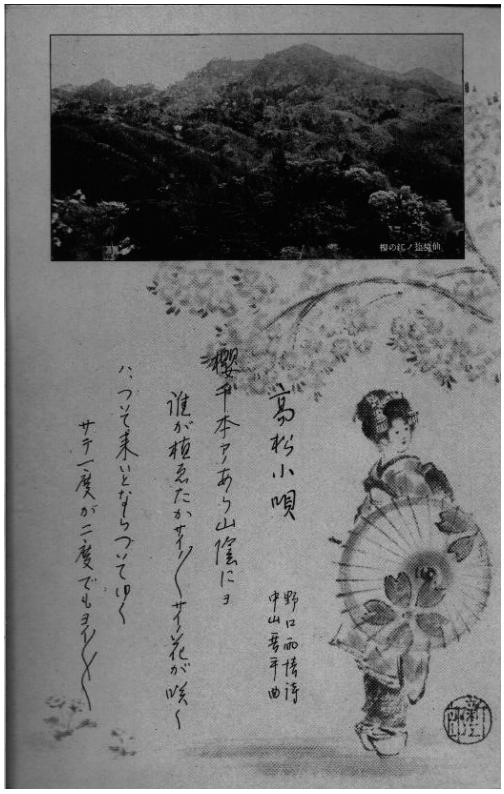

図 12　《高松小唄》絵葉書　仙境塩ノ江の櫻

図 13　《高松小唄》絵葉書　津田の松原

1931（昭和６）年１月，ビクターからＳＰレコード（51489）が発売され，Ａ面で１～４番を葭町二三吉，Ｂ面で５～７番を四家文子が唄う。葭町二三吉は芸者歌手であったのに対し，四家文子は 1928（昭和３）年，東京音楽学校本科声楽部を卒業し，西洋音楽を学んだ歌手である。当時のビクターの特徴で，１枚のレコードに「モダン芸妓」の端唄スタイルのヴァージョンと洋楽系の歌手が唄ったものが収録されている[53]。

ところで，四家文子の同学年の本科器楽部に，ピアニスト園田高弘（1928-2004）の父，園田清秀（1903-1935）が在籍し，校長排斥運動を起こす。四家文子も女生徒の代表として参加したため，優秀であったにもかかわらず，母校に残ったり，武蔵野音楽学校の教員になったりという話は立ち消えてしまった。1929（昭和４）年，ビクターの専属歌手となる。徳山璉（1903-1942）や，橋本国彦（1904-1949）も同じ時期に入社する。四家文子のデビューレコードは，映画主題歌の《不壊の白珠》で，Ｂ面には東京音楽学校を中退した，佐藤千夜子（1897-1968）が歌う《峠の小道》が録音される。1930（昭和５）年，佐藤千夜子がイタリアへ留学してしまったため，彼女の役割が四家文子に回ってきた。中山晋平からは「君の声はさびがあって，民謡にむいていますよ」と言わ

れ，日本風のこぶしの歌い方の指導を受ける[54]。

1933（昭和８）年５月に高松市役所から発行された「高松観光案内」のパンフレットにも《高松小唄》の歌詞が７番まで掲載されている。他の楽曲は掲載されていないことから,《高松小唄》は観光のための宣伝歌としても重要な働きをしていたことが分かる。

Ⅵ. 考察

前述の通り,『香川県綜合郷土研究』において新作民謡が愛郷の心を培うことができると締めくくられていた。最後に郷土教育と愛郷心愛国心の関係について整理しておきたい。

伊藤純郎によると，当初の文部省の郷土教育運動論では，観念的な愛郷心愛国心涵養や偏狭なる愛郷心の啓培を否定していた[55]。1931（昭和６）年の師範学校規程中改正に基づき，「公民科」の新設に伴い，愛郷心愛国心涵養型郷土教育運動へと変わったとする[56]。さらに「綜合的郷土教育」とは「郷土社会の有機的な関係」を情緒的に把握することで愛国心の涵養をめざすという論理であったと指摘する[57]。

『山梨県綜合郷土研究』同様,『香川県綜合郷土教育研究』においても愛郷心愛国心の涵養をめざしていた。

「第十三　結論」では，以下の通り，始まる[58]。

> 聖戦の戦果が著して拡大して，東洋永遠の平和のために，東亜新体制を建設しつつある時，最も必要とするものは，一億の国民が日本の此の大使命をよく感得して，此の大目的達成のために長期にわたつて，一致協力すべき事である。

さらに以下の記述もみられる[59]。

> 讃岐人は冒険性が強く勇敢である。この気質が古来幾多の戦によく表れてゐる。亦この気質が海運界に表れて塩飽の水軍となつたのである。今後この気質を航空界に利用するならば立派な航空士を養成する事が出来るであらう。今回の支那事変にあたつて活躍された空の勇士の中に讃岐人の多い事は，これを裏書してゐる。

日中戦争の渦中の中であり，1932（昭和７）年には「国民精神文化研究所」が設立された時期でもある[60]。国家主義・軍国主義が強化されている動向が上記からも読み取れる。

おわりに

香川県師範学校では，1930（昭和５）年の郷土研究施設費交付以前の 1928（昭和３）年には，郷土調査が行われていた。

1936（昭和 11）年度，文部省から香川県が指定され，1939（昭和 14）年３月,『香川県綜合郷土研究』が発行される。1936（昭和 11）年 12 月に発行された『山梨県綜合郷土研究』を参考に編纂された。

「民謡」は「第十一　文化」の大項目の中に掲載される。「一　序言」,「二　伝統的民謡」,「三　新作民謡」の順で構成され，執筆は音楽を専門とする，香川県師範学校教諭の鈴木武五郎によってなされた。『山梨県綜合郷土研究』では，手工を専門とする教諭によって執筆された。他方，初期の民謡研究は文学の領域で行われていたため，鳥取県師範学校では国語漢文の教諭によって執筆されていた。これらの状況を踏まえると,『香川県綜合郷土研究』では音楽の教諭によって執筆されたことは特筆すべき点である。

「新作民謡」も取り上げられ,「新作民謡には，主として観光讃岐を歌つたものが多く，随つて郷土紹介，名勝讃美の内容を具有してゐるものが多い」と解説され，20 曲の香川県の新民謡の曲名が紹介される（表３）。20 曲中，11 曲（55%）が，1934（昭和９）年に発行された『讃岐遊覧』に掲載されていた新民謡であった。レコードが発売されたのは,《坂出小唄》,《多度津小唄》,《高松小唄》,《香川県行進曲》の４曲（20%）であった。

1930（昭和５）年８月に発表された，野口雨情作詞，中山晋平作曲の《高松小唄》について，歌詞に関しては野口の意向で，高松に限定せず，広く讃岐の名所旧跡を背景とする。音楽に関しては,《金毘羅船々》や《塩田小唄》と牴触しないように作曲され，イ音を主音とする短音階学童旋法が使用される。1931（昭和６）年１月，ビクターからＳＰレコード（51489)が発売され,葭町二三吉と四家文子が唄う。当時のビクターの手法であった二頭仕立ての特徴がみられる。

これらの新民謡は，観光客の旅情を慰める他，地方青年子女の愛郷の心を培うことができると捉えられていた。

1937（昭和 12）年４月，香川県師範学校本科第一部へ入学し，1942（昭和 17）年３月に卒業した，故田山清美氏から，新民謡を授業で唄ったという証言

を得ることはなかった。また，1941（昭和 16）年３月から 1944（昭和 19）年 12 月まで，香川県師範学校教諭であった故金光武義氏から，新民謡を指導したという証言を得ることはなかった。

1945（昭和 20）年７月４日の高松空襲により，香川県師範学校はほぼ全焼してしまったため，当時の資料も失われてしまった。『香川県綜合郷土研究』には，「この綜合郷土研究の結論や，其の結論に至つた諸研究が，男女両師範学校に学ぶ生徒を始め，教育家並に一般人士の香川県に対する認識を深め，之を純愛する真情を涵養し以て之を教育其他に応用すると共に，更により深く，より細く郷土研究をなすの心眼を開く参考資料となることを熱望する」と締めくくられる[61]。おそらく当時の生徒たちは，ちまたで耳にする新民謡に親しみを感じながら，生活の中で口ずさむことがあったのではないかと推察する。そして『香川県綜合郷土研究』を読むことで，それらが新作民謡であったと整理することができたのではないかと考えられる。

表３　香川県における新民謡

	曲名	年	作詞	作曲	振付	レコード発売年	掲載
1	高松観光節	1937(昭和 12)					
2	讃岐小唄						○
3	坂出小唄	1932(昭和 7)	西条八十	中山晋平		ビクター1932	○
4	仁尾小唄	1933(昭和 8)	吉岡武雄	吉岡武雄			○
5	善通寺小唄		野口雨情	阪本歌都子			
6	多度津小唄	1933(昭和 8)	西条八十	中山晋平		ビクター1933	○
7	紀伊村歌						
8	福日音頭						
9	観音寺囃子						
10	有明小唄						○
11	染川節						
12	安田音頭		国井重二	大野寛正			○
13	小豆島小唄		中岡草多処	杵屋和吉			○
14	象郷音頭						
15	高松小唄	1930(昭和 5)	野口雨情	中山晋平		ビクター1931	○
16	香川県行進曲	1933(昭和 8)	長田幹彦	中山晋平		ビクター1933	
17	塩田小唄		荒井情児	佐々紅華			○
18	高松ノーエ節						○
19	讃岐踊の歌	1935(昭和 10)	河西新太郎				
20	高松節						○

注　○：『遊覧讃岐』に掲載。

謝辞

本稿を作成するにあたり，香川県立図書館から詳細な資料情報を得ました。ここに記して，お礼，申し上げます。

付記

本研究は，JSPS 科研費　21K02465（基盤研究Ｃ「戦前の新民謡運動を契機とした師範学校における郷土教育の展開と戦後への波及」）の助成を受けたものである。

本稿は，2021 年度日本音楽教育学会中国四国地区例会（2022 年３月，オンライン）において口頭発表した内容を発展させたものである。

注

[1] 伊藤純郎『増補　郷土教育運動の研究』思文閣出版，2008 年，pp.95-169。

[2] 同書，pp.361-407。

[3] 鈴木慎一朗「『山梨県綜合郷土研究』における新民謡：『微細郷土研究：加納岩町に関する』を参照して」『地域学論集』第 18 巻第２号，鳥取大学，2021 年，pp.17-32。

[4] 外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究：『綜合郷土研究』編纂の師範学校を事例として』ＮＳＫ出版，2004 年，pp.415-454。

[5] 東道人『野口雨情　詩と民謡の旅』踏青社，1995

年，pp.220-224。

[6] 「古里の歌，時代越え復活　昭和初期，名所集めた《高松小唄》」朝日新聞朝刊，2003 年 5 月 17 日。

[7] 鈴木慎一朗，博士論文『昭和戦前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科，2006 年。
鈴木慎一朗「国民学校発足期の師範学校における鑑賞指導：『標準師範学校音楽教科書』の分析と香川師範学校の事例を中心に」『音楽表現学』vol.3，日本音楽表現学会，2005 年，pp.31-47。
鈴木慎一朗「香川師範学校男子部における聴覚訓練の実践：1941～45 年を中心に」『音楽表現学』vol.4，日本音楽表現学会，2006 年，pp.79-94。

[8] 佐藤隆博・戸崎敬子「旧満州日本人学校における「特別学級」の実態［Ⅱ］：満州教育専門学校附属小学校（奉天千代田小学校）の事例を中心に」『高知大学教育学部研究報告』第 1 部第 43 号，高知大学，1991 年，pp.61-73。

[9] 嶋田道彌『満州教育史』文教社，1935 年，pp.343-345。

[10] 杉森知也「「満洲国」における中等教員養成：日本人教員の再教育と養成の開始に着目して」『研究紀要』90，日本大学文理学部人文科学研究所，2015 年，pp.79-93。

[11] 鈴木健一「満洲国の国民教育と教員養成問題」『歴史における民衆と文化：酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集』図書刊行会，1982 年，pp.645-661。

[12] 槻木瑞生「「満州」に於ける教員養成：「満州国」師道学校について」『調査研究報告』No.30，学習院大学東洋文化研究所，1990 年，pp.1-17。
小谷野邦子「「満洲」における教員養成」『茨城キリスト教大学紀要』第 45 号，茨城キリスト教大学，2011 年，pp.245-259。

[13] 大森直樹・金美花・張亜東「中国人が語る「満洲国」教育の実態：元吉林師道大学学生，玉野平氏へのインタビュー記録」『東京学芸大学紀要』1 部門 45，東京学芸大学，1994 年，pp.47-61。
林鼎鉄「吉林師道大学の思い出」斉紅深編・竹中憲一訳『「満州」オーラルヒストリー：「奴隷化教育」に抗して』皓星社，2004 年，pp.241-247。

[14] 鈴木健一「満洲国における日系教員養成問題：国立中央師道学院を中心に」『近畿大学教育論叢』第 6 巻第 2 号，近畿大学，1995 年，pp.9-26。

[15] 寺田一清『森信三小伝』致知出版社，2011 年，pp.81-82。

[16] 「師範志望の減少　小学生訓育上由々しい問題と　文部省頭をひねる」『朝日新聞』東京夕刊，1939 年 7 月 22 日，p.2。

[17] 逸見勝亮『師範学校制度史研究：15 年戦争下の教師教育』北海道大学図書刊行会，1991 年，pp.119-160。

[18] 「在満師範学校規則」『官報』第 4369 号，1941 年 7 月 31 日，pp.1010-1013。

[19] 「生徒募集（本科男子）」『朝日新聞』東京朝刊，1943 年 12 月 24 日，p.2。

[20] 須古将宏「満洲の教育：教員養成機関の変遷とその背景」山根勉編『旅順師範学校』旅順師範学校同窓会・志道会，1978 年，p.18。

[21] 坂本麻実子「大正音楽教育界における文検出身教員の軌跡」『桐朋学園大学研究紀要』36 巻，桐朋学園大学，2010 年，pp.115-116。

[22] 香川県師範学校『郷土館施設概要』香川県師範学校郷土研究部，1933 年，p.1。

[23] 同書，p.2。

[24] 同書，p.2。

[25] 同書，p.3。

[26] 同書，p.3。

[27] 同書，p.4。

[28] 同書，p.4。

[29] 同書，p.5。

[30] 外池，前掲書，pp.417-418。

[31] 香川県師範学校・香川県女子師範学校共編『香川県綜合郷土研究』共同印刷，1939 年，p.881。

[32] 同書，pp.881-882。

[33] 同書，pp.733-734。

[34] 同書，p.734。

[35] 同書，p.737。

[36] 日本放送協会編『日本民謡大観（四国篇）』日本放送出版協会，1973 年，p.74。

[37] 香川県師範学校・香川県女子師範学校，前掲書，p.737。

[38] 同書，p.738。

[39] 同書，p.738。

[40] 高松市史編修室『高松市史年表』高松市役所，1960 年，p.419。

[41] 香川県師範学校・香川県女子師範学校，前掲書，p.738。原文の表記を使用。

[42] 末澤信夫「六，塩田民謡・歌謡」香川県女子師範学校郷土室編『塩田研究』香川県女子師範学校，1939 年，pp.490-491。

[43] 香川県国立公園協会編『遊覧讃岐』香川県国立公園協会，1934 年，p.45。

[44] 香川県師範学校・香川県女子師範学校，前掲書，p.738。

[45] 1934（昭和９）年３月には，瀬戸内海国立公園に指定され，７月には，『讃岐遊覧案内』が大阪商船から発行される。
谷沢明『日本の観光：昭和初期観光パンフレットに見る』八坂書房，2020 年，p.237。

[46] 香川県国立公園協会，前掲書，p.51。

[47] 「野口雨情　中山晋平の両氏来高　《高松小唄》製作のため　取材は讃岐の名所旧蹟を背景に」『香川新報』1930 年 7 月 22 日。

[48] 「野口，中山の両氏が「民謡」の実地指導　きのふ四番丁校で」『香川新報』1930 年 7 月 24 日。

[49] 「自分で　歌つて楽しむ　極く平易に作曲　中山氏の感想談」『香川新報』1930 年 8 月 31 日。

[50] 「《高松小唄》は大衆的盆踊りを加味　舞踊は円舞総踊りと宴席風　曲は二上りで洋楽のハ調」

『香川新報』1930 年 8 月 31 日。
[51] 中山晋平「流行歌の作曲」『アルス音楽大講座 第 4 巻　作曲の実際』アルス，1936 年，pp.179-180。
[52] 同書，p.180。
[53] 渡辺裕『日本文化　モダン・ラプソディ』春秋社，2002 年，pp.110-115。
[54] 四家文子『歌ひとすじの半世紀』芸術現代社，1978 年，p.58。
[55] 伊藤，前掲書，p.130。
[56] 同書，p.142。
[57] 同書，p.366。
[58] 香川県師範学校・香川県女子師範学校，前掲書，p.875。
[59] 同書，p.880。
[60] 前田一男「国民精神文化研究所の研究：戦時下教学刷新における「精研」の役割・機能について」『日本の教育史学』25，教育史学会，1982 年，pp.53-81。
[61] 香川県師範学校・香川県女子師範学校，前掲書，p.880。